

「なんとも妙な選挙戦になりそうだ」。昨年末、北見市議の一人が漏らした。今年三月に市議の改選期を迎えるが、いつもとは選挙の様相が異なっているからだ。「本来、引退するはずの人が引退を表明しない。立候補する人数を見て、無投票で当選する可能性があるのなら、再出馬しようとしているのではないか」。こんな疑心暗鬼が漂っているという。

北見市議会の定数は二八。二〇〇六年の周辺三町と合併後、三回の市議選があつたが、立候補者はいずれも定数を上回つてきた。北見市では過去二〇年以上、市庁舎の建設問題を巡り、市内を二分して論争が続き、市長選は現職が敗れるケースが相次いだ。市長選に連動して市議選も激戦が繰り広げられてきたが、一五年に、自民党、民主党（当時）などの相乗り市長が誕生。庁舎問題が決着し、昨年末に新庁舎の建設工事が始まつた。

今回の市議選の様相は、庁舎問題の決着という市政の状況を反映したのかもしれない。だが、前述の市議は「やはり議員のなり手不足が要因ではないか」と指摘する。町村レベルでは深刻化していた「無投票」の波が、地方の中心城市にも、ひたひたと押し寄せているようだ。

◇ ◇

地方選は消えるのか

三年前の統一地方選で、無投票で議員が決まつたのは、二九五市議選のうち、約四％の一五市議選。前回より六市増えて過去最高だった。町村議選では三七三町村のうち約二二％の八九町村に上つた。

道内では、二六六市議選のうち、無投票だったのは五市。町村議選では、一〇〇町村のうち、三二町村で無投票だった。首長選はさらに危機的だ。一三市長選のうち、八市長選が無投票。町村長選は三六町村の半数に上つた。

昨年一年間の道内の自治体選挙を見ると、事態はより深刻さを増しているようだ。五市長選はすべて無投票当選。三八町村長選は約六割の二二町村で無投票。議会選挙では、二市議選が定数を超え選挙戦となったものの、町村議選では一三町村の半数近くの六町村で無投票となった。有権者が一票の権利を行使できずに、議員が決まつてしまうケースが着実に広がっている。北海道は「無投票先進地」となつてしまったのだろうか。

全国の市町村では、こうした流れを受け、さまざまな取り組みが起きている。高知県大川村では、村議会を廃止し、住民が議案を直接審議する「村民議会」の設置を一時検討した。長野県喬木村たかぎ村議会では、審議日程を夜間・休日に集中させている。北海道

町村議会議長会は昨年夏、議員のなり手不

足は民主主義を壊しかねないとして、休職や休暇など議員になりやすい環境の整備や、選挙費用の公費負担拡大、社会保障制度の充実などを国に要望した。十勝町村議会議長会は、道内の議員の平均月額報酬が全国で三番目に低いことから、約二割増の約二二万円とする「十勝標準」を定めた。各市町村は、あの手この手の策を講じているが、即効策がないのが実態だ。

◇ ◇

議員のなり手不足は議員の質の低下にもつながる。政務調査費を不正に使つたり、ブログなどで他人を中傷したりと、議員以前に社会人としても失格となる言動を繰り返す地方議員は後を絶たない。だが、議員の質がどうであれ、議会で議案が可決されなければ、行政は何も進まない。議会は住民の生活を左右する場でもある。

「議会からなんらかの善きものを期待しない国民は、議会を抑制したり、非難したりする資格を持たない」。一九世紀の英国で活躍したジャーナリスト、ウォルター・バジョットの言葉だ。

統一地方選まで一年余り。平成最後の地方選がかつてない「無風」選挙となるのか。新たな議会のあり方を示すきっかけとなるのか。残された時間は少ない。

ハ洋▽